

ドクター
メモ

薬物依存症

正しく使えば依存予防に

昨今何かと注目や話題を集めている薬物依存症。軽い気持ちで薬物に興味湧かない

ようにすることも大切ですが、逆に過剰に遠ざけて否定してしまっても、薬物依存症の予防にはつながりません。冷静に落ち着いて考えるためには、正しい知識が必要であると思います。

まず、依存と依存症をきちんと分けることが大切です。本来、依存は人間誰もが持っている生存本能の一つですが、依存症はその名のとおり病気の状態で、病的な精神依存と病的な身体依存が起こってしまったときに生じます。

生物が薬物に慣れて強くなる現象を「耐性」といい、薬物が身体から抜けていく(離脱する)ときに激しい症状が出現するようになります、病的な身体依存が形成されているという診断になり、すなわちそれが

薬物依存症の診断基準の一つとなつていきます。

二つの間違った薬物の使い方によって依存が依存症に進行していきます。一つは乱用、目的を誤った使い方です。もう一つが濫用らんよう、あふれるように使うという意味であり、必要以上の量を使つ使い方です。

乱用によって病的な精神依存が強まっていきます。そして、濫用によって身体依存が強化され病的な水準へと進行していきます、薬物依存症が形成されるのです。

これを予防するために、「医師の指示通り(乱用防止)、容量をよく守り(濫用防止)」薬剤を使用することがとても重要です。その中で、人間が編み出した薬物という道具を否定するのではなく、正しく利用していくことが大切ですね。

吹田市医師会

稲垣 いながき

亮祐 りょうすけ